

【12】 原始仏教聖典に記された螺髻梵志

[1] 以上、【1】においては「律藏」に登場する螺髻梵志としての三迦葉を通じて、【5】から【11】までは、原始仏教聖典ならびに後期聖典をもとに、その種姓、姿形と身だしなみ、住生活、食生活、修行形態、持ち物など螺髻梵志に関する記事を調査し紹介してきた。以下にこれをまとめておこう。

[1-1] まとめるにあたっては、原則として上記の資料紹介の順序にしたがったが、螺髻梵志の実態がより分かりやすいように、必ずしもそれを完全に順守しているわけではないことを諒とされたい。

[1-2] 原始仏教聖典と後期の原始仏教聖典に見られる螺髻梵志は次のようになる。

- (1) 螺髻梵志はバラモン階級出身のバラモン教の修行者であった。バラモン階級以外の再生族にも螺髻梵志にした修行者がいたようであるが、これは例外である。
- (2) 彼らは「出家」者として認識されていたが、しかし仏教の出家のように完全に「家」と絶縁するのではなく、ある場合には家族もるとも、あるいは夫婦で出家することも可能であり、しかももとの住居の近くの阿蘭若にアーシュラマを構えて、親族・近親・友人・知人とも関係を継続するというケースもあったかも知れない。したがって釈尊の弟子となるときには改めて「出家」し、「梵行」を修すことを誓った。
- (3) 彼らは「仙人」とも呼ばれる。これは苦行的な修行者に対する一般的な呼称であるが、しかし見いだされる用例は後期聖典に多く、原始仏教聖典には少ない。また仏教の修行者がこういう呼称では呼ばれるケースはほとんどない。
- (4) 彼らは頭髪を長くして、これを頭の上でぐるぐる巻きにしてまとめていた。これが螺髻梵志のいわれであるが、しかし長くした髪の毛をどのような形にまとめなければならぬということはなく、お下げ髪のようにしたり、ただぼうぼうと伸ばし放題に伸ばしているという者や、バラモンの修行者の中には禿頭の者もあったかもしれない。
- (5) 彼らは髪の毛のみならず髭・体毛や爪を長くしていた。仏教の修行者は禁止されていたが、原始仏教時代にはニガンタを含む放浪者的な出家生活をする一般の宗教者に共通するものであったかも知れない。
- (6) 彼らは獣の皮で作られた大衣を着ていた。獣は鹿が一般的であった。
- (7) 彼らはまた樹皮で作られた上衣と下衣を着ていた。これは赤く染められることが多かった。しかしこれは後期聖典の螺髻梵志イメージで、原始仏教聖典にはこれに関する記述はなく、螺髻梵志に特定せず、樹皮で作った衣を着ていた宗教者があったことに言及するのみである。
- (8) 螺髻梵志には歯も磨かず、顔も頭も汚いというイメージがあった。しかしこれは一部の螺髻梵志で、普通の螺髻梵志は伸ばした頭髪はきちんと頭の上で螺髻にし、身体も清潔を保っていたのではないかと思われる。
- (9) 彼らは村や町の郊外の静かな場所にアーシュラマを作って住んだ。これは今のヒンドゥー教のサドゥーたちが形成するようなアーシュラムを想像すればよいと考えられる。
- (10) そのアーシュラマにある彼らの住居は「草庵 (paṇṇasālā)」と表現されるような、

草で覆われた粗末な小屋であった。露地に住することも勧められた。ただし螺髻梵志が「草庵」に住んだとするのは後期聖典のみである。

- (11) アーシュラマには多数の螺髻梵志が集まって住するケースも多かったが、しかしそれは組織化された集団ではなく、師弟関係はあったとしても原則として一人ひとは独立していたのであり、それぞれ自分の草庵を持っていたのではないかと思われる。
- (12) 果実や木の根、特に自然に落ちたものを食して生活することが尊ばれた。しかし他のものを食してはならないという禁忌のようなものがあったとは思われない。
- (13) 彼らは断食や節食を行っていた。後期聖典にはその資料が見いだせないが、おそらく全ての宗教の修行者に共通することで、それがあまりに普通のことなのでことさら記述する必要を認めなかったからであろう。
- (14) 彼らの修行は「苦行 (tapa)」と称される部類に属すると認識されていた。その具体的内容は以下のようなものである。
- (15) 彼らは日常的に火を祀ることを行った。これは「供犠」と呼ばれる。
- (16) 彼らは修行の一環として沐浴を行っていた。それは早朝や朝夕、あるいは1日に3度なされた。また冬の寒い日にもなされた。
- (17) 大規模な「供犠」も行われた。この供犠には犠牲獣が供されることもあったかもしれない。
- (18) 彼らは修行として、蹲踞や立ったままで坐らないとか棘に臥すことも行った。しかしこれは必ずしも螺髻梵志には限定できないし、それが常態であったのではなく、むしろ苦行としての特殊形態であったのではないかと思われる。
- (19) また泥や灰を身体に塗り、塵垢にまみれるというようなことも行った。
- (20) 彼らはヴェーダや真言の読誦を行った。彼らはバラモンの修行者であったから当然のことである。
- (21) 彼らは持ち物として事火の道具や水瓶を持っていた。また鉢も持っていた。
- (22) 彼らはこれらを天秤棒に前後にぶら下げて運んだ。しかし他の宗教者もそれなりの荷物を持っており、これを肩に担いで持ち運びしたようである。原始聖典資料には「天秤棒」の用語はない。
- (23) 彼らは杖も持っていた。その杖は「イチジク」の木のような、曲がった自然の枝を用いたものであった。
- (24) 彼らは進んで他の宗教者を供養した。供養をなしうる環境にあったということであり、出家とはいいながら俗生活から完全に離脱するということにはなかったからであろう。
- (25) 彼らは欲を肯定していたともされるが、それは家族や夫婦でも許される出家で、必ずしも「梵行」が絶対的に要求される形のものではなかったが故の偏見であろう。
- (26) 彼らは天文地理や算数あるいは植物学的な知識を有する者として尊敬されていた。
- (27) 彼らのなかで高德のものは「牟尼」「阿闍梨」と呼ばれた。これは当時の宗教界に共通した用語であるが、しかし彼らは仏教の修行者を「沙門」と呼び、沙門とは異なる修行者であるという自覚を持っていた。時には「阿羅漢」と呼ばれる場合もあったが、これも沙門系の用語であったかも知れない。

(28) 「律藏」では螺髻梵志は「業」の思想を持っていたとするが、その他の典籍では確認することができない。

(29) 螺髻梵志のアーシュラマには龍が住んでいたとする資料がいくつかあるが、これは螺髻梵志に特有の特徴と見るべきではないであろう。

これを原始仏教聖典に記載されている事項と、後期の聖典に記載されている事項に分けて表にしてみよう。これは記載されているかどうかであって、実際がどうであったかは別の考察を必要とする。記載されているものは○、記載されていないものは×、曖昧な場合は△とした。

項目		原始聖典	後期聖典	備考
1	バラモン階級	○	○	例外的に他の階級の者もいた
2	出家	○	○	仏教的な出家ではない
3	仙人	△	○	原始聖典には少ない
4	長髪の螺髻	△	○	原始聖典では禿頭の者もあった
5	髭・体毛・爪	△	○	原始聖典では他の宗教者も含まれる
6	鹿皮の大衣	△	○	原始聖典では裸行・一衣の者もあった
7	樹皮の上・下衣	△	○	原始聖典では他の宗教者も含まれる
8	不潔	×	○	仏教側からの悪口
9	アーシュラマ	○	○	
10	草庵	×	○	後期になって仏教との差ができた
11	集団	○	○	仏教のサンガとは異なる
12	木の根・果実	○	○	
13	節食・断食	○	×	後期聖典にないのは当然のことであるからであろう
14	苦行	○	○	他の宗教者と共通する
15	火を祀る供犠	○	○	
16	沐浴	○	○	
17	大規模な供犠	○	○	
18	蹲踞	○	○	後期聖典は <i>Jātaka-aṭṭhakathā</i> のみ
19	泥や灰	○	○	
20	ヴェーダ・真言	○	○	
21	水瓶	○	○	

22	天秤棒	△	○	原始聖典では他の宗教者と共通する。 天秤棒とするのは <i>Jātaka-aṭṭhakathā</i>
23	杖	○	○	曲がった杖、イチジクの杖、三杖
24	宗教者の供養	○	○	
25	欲の肯定	○	○	仏教側の偏見
26	天文地理の知識	○	○	
27	牟尼・阿闍梨	○	○	

[2] 以上 ‘jaṭila’ ‘jaṭā’ ‘jaṭin’ あるいは「螺髻」「結髪」「編髪」などの語句を手がかりとして、原始仏教聖典および後期聖典を調査してきた。その纏めが前項の表であるが、これをもとにして若干の分析をしておく。

[2-1] まず原始仏教聖典においては△が多い。これはバラモンの修行者には禿頭もあれば裸行や一衣の者もあって、必ずしも螺髻とか鹿皮・樹皮の衣を着ることに限定されないということや、あるいは鬚・体毛・爪を伸ばすとか鹿皮や樹皮を着るのはバラモンの修行者には限定されないということの意味する。要するに原始聖典のバラモン修行者のイメージにはさまざまなものがあって、「螺髻」「鹿皮」「樹皮衣」といったはっきりしたイメージは未だ形成されていなかったということの意味する。

しかし一方では「螺髻梵志」という用語が原始聖典にもあったわけであるから、三迦葉やケーニヤに代表される髪を伸ばしてそれを頭の上でぐるぐる巻きにしていた「螺髻梵志」という修行者がいたことは確かである。しかし彼らは必ずしもバラモン修行者を代表し、象徴するものではなかったということであり、また彼らのすべてが鹿皮と樹皮の衣を着、鬚や体毛・爪を伸ばしていたのではない、ということの意味する。しかし彼らの住処はアーシュラマと呼ばれ、そこで集団的に生活し、ヴェーダや真言を誦し、火を祀り、沐浴し、時には大規模な供養を行うという螺髻梵志の特徴は備えていた。

[2-2] しかし後期聖典になると○ばかりになるということは、螺髻にして鹿皮衣の重衣（大衣）と樹皮衣の上衣と下衣を着、水瓶と杖を持ち、天秤棒に荷物を担い、アーシュラマに住むという「螺髻梵志」像が確立し、それがバラモンの修行者を代表することになったということの意味する。また後期の原始聖典資料が「草庵」に住むとするのは、後の仏教の比丘・比丘尼が僧院に住することになって、それによってこれが螺髻梵志の特徴となったものと言えるかもしれない。

[2-3] これらは後に述べる「法典」の記述との関連、ひいてはヒンドゥー教のアーシュラマ（四住期）の成立時期などとも関係してくるので、詳しい考察は後に譲りたい⁽¹⁾。

(1) *Jātaka*における仙人の生活については、佐久間光昭氏の「ジャータカの仙人像(1)」(『印仏研究』57 昭和55.12) (pp.116~117)、「ジャータカの仙人像(2)」(『印仏研究』62 昭和58.3) (pp.876~874)という論文がある。これを簡単に要約して紹介しておく。螺髻梵志は仙人と重なることがよく分かるであろう。

一般的に仙人出家では特に誰かにつく必要はなかったようである。仙人の修行するところは、山岳・森林・川や池の近く・水浴場・都市・町・村の近く、国境、王園などがある。山

岳（特にヒマラヤ）で出家修行する例が多い。庵には細い道を通じ、近くに蓮池、水浴場、井戸がある例がある。便所は川屋ではなかったようだ。庵の中には水がめ、臥床木や板でできた敷物がある。仙人は髪を結び、赤い樹皮の衣を上下に着け、獣皮を一肩にかける。持ち物には杖、天秤棒、水瓶、坐具、楊枝、托鉢の器、小刀などがある。食物は朝に森の草木の根や果実を集めて出て夕方に持ち帰る。落ちている果実を食べ、生存に必要なだけを食べた。マンゴー、ニグローダの実、蓮根などである。もみで包まれたものは食べない者もいた。修行は苦行と禪定であった。雨期になると草木の根や果実は得にくくなり、山を出て遊行する。遊行の目的は「塩のものと酸っぱいもの」を求めてである。山を出て雨期を過ごすところは、村の近くの場合もあるが、多くはバーラーナシーやラージャガハなどの都市の近くの王園である。城内に托鉢に回る。王や長者などが食事を提供する例も多い。庵に住むこともあり、ただ木の根にいることもある。仙人はほとんど男であるが、女仙人もわずかながら存在する。

仙人の修行する場所は *assama*（仙処）と呼ばれる。仙人は痩せて爪髪は伸び、歯は汚れ頭は塵垢にまみれていた。袈裟・樹皮衣・皮衣をまとい、髪を結んでいた。バラモンの姿をしていたともされる。食物は落果や草木の根によって生活する。修行は苦行、梵行。能力として神通力を持ち、空中を飛行する。梵行を破ると神通力を失う。仙人は火神を祀り、呪文を唱える。仙人は一人で修行することも集団で修行することもあった。人々は仙人に説法を願う。修行地については、ガーターでは林野が多く、アッタカター部分では山岳を中心として森林、川や池の近くなどである。修行能力ではガーターは苦行が中心であるが、アッタカターでは遍・禪定・神通・等至なども強調される。

また佐久間光昭氏には「ジャータカの独覚像」（『印仏研究』64 昭和 59. 3）（pp. 1061～1059）なる論文がある。これも参考のために紹介しておく。これは「法典」の第4のアーシュラマである遊行者と重なる部分がある。

独覚は三法印、観法によって覚る。十二因縁を観じるのではない。禪定や苦行は覚りの手段としては登場しない。独覚の住処はヒマラヤの北のナンダムーラの洞窟である。またガンダマダナ山ともされる。アノータッタ池も利用する。独覚は一人ではかぎらない。J.424、495、514 では 500 人の独覚という記述がある。衣・袈裟・糞掃衣を着、腰帯をする。頭髪は J.459 では「2 指の長さ」とされ、J.408 では髪と髭を剃り落としていたとされる。托鉢によって生活する。食事の内容は、硬食（J.96）、団食・粥・米飯・餅（J.390 他）、カレー（J.496）、果実（J.514）、蓮根（J.514）、酥（J.531）。空中を飛び、座す。神通力によって鉢などが作られる。独覚は家にも種族にも執着しない。煮炊きせず、させず、切らず、切らせない。独覚は説法し、出家を勧める。独覚の弟子というものは見られない。独覚の教化を受けたものは独覚にならず、仙人出家する。